

松下清雄『草青火 鳴かなかった鳥たちの祀り』を読む

倉本知明

だが、お前は真の私を包むこの肉体を犠牲とし、すべての弟子たちを超える存在になるだろう。(中略) さあ、これでお前にはすべてを語ったことになる。目を上げ、雲とその中の光、それを囲む星々を見なさい。皆を導くあの星が、お前の星だ。

『ユダの福音書』より

裏切りとは、他者への癒しがたい渴きを永遠のものとして自覚することから始まる（だからこそ、裏切りはしばしば愛と隣り合わせのものとして語られるのだ）。そのため、裏切りを知ってしまった者とは、必然的に孤独である。彼らはもはや他者との間に何らかの紐帯を結ぶことが出来ない。なぜならその裏切りが深ければ深いほど、その心に抱える孤独もまたそれに見合ったものとなるからだ。さらに、裏切りを経験した彼らの頭上には常に罵声と数多の磔^{つぶて}が、それを経験しなかった（と信じている）者たちから、当然の如く投げつけられる。それは、まるでそう、イエスをローマへと売ったあの永遠の背徳者、ユダのように。

松下清雄の『草青火 鳴かなかった鳥たちの祀り』（以下『草青火』）は、そんな裏切り者たちの深い孤独と苦渋に満ちた人生が、1950年前後の北関東のとある村を舞台に、そこに生きる農民やけものたち、そして冥界の住人といった多種多様な声を通じて描き出されている。作者である松下氏の経歴やその思想的背景に関して、ここで云々することは差し控えたい。その経歴に沿って物語を読むことは、ともするとこの豊饒な物語に分度器ともものさしを持ち込むことになりかねないからだ。そのことに意味がないわけではないが、ここでは何の羅針盤を持たずに、難破の可能性を十分に理解しつつも、ひとまずこの大海原に飛び込んでみることから始めたいと思う。

物語は、「ぼく」と呼ばれる青年によって語られる。ふとしたことから「ぼく」の爺さまが若い頃に書き付けたという膨大な量のメモの中に書かれた「カレ」／「あんひと」の存在に魅せられた「ぼく」は、その過去を探るためにあらゆる手練手管^{わるだくみ}、奸計を用いて、爺さまにそのことを吐かせようとする。しかし、爺さまは一向に口を開かぬままあの世へ逝ってしまい、代わって「ぼく」は爺さまを目の敵にしている殺し屋たちから命を狙われるはめになる。「ぼく」は爺さまの過去を知るため、そしてまた爺さまと「ぼく」を狙っている殺し屋たちの目的を知るために、50年前に山人の丘と呼ばれる村の未開墾地をめぐる、爺さまら組合員たちと地主やヤクザたちとの間で争われた戦いについて語り始める。「ぼく」は、爺さまとその運動のリーダーであった「あんひと」との関係語ることで、複雑に絡まりあったその過去を何とか解きほぐそうと試みるのだった。

この物語の特徴のひとつに、土地言葉を話す農民たちの、尽きることのないその饒舌さがあ

げられる。つぶやきや愚痴、戯言に怒声、卑屈さの裏に隠された面従腹背の精神など、彼らが発するその声は、まさに戦後文学の中で常に見落とされ続けてきた農民たちの世界観そのものであるといえる。しかし、こうした農民たちのさまざまな声によって成り立ったこの物語は、しばしば地を這う蟻たちやお喋りなミミズク親子、それに皮肉屋のカラスや冥界の幽鬼たちといった、まさに人ならぬものたちによって横領されることで、その世界観はより重層的なものとなっている。その上、語り手である「ぼく」の語りに不満を覚えた登場人物たちは、テキスト内でそれへの反逆宣言までしてしまう始末なのだ。それぞれに独立し、決して互いに溶け合うことのない数多の声が溢れる『草青火』は、まさにバフチンが云うところの^{ボリフ}多声・^ニ多響性の物語であるといえるだろう（あるいはそれは、農村的世界観や農民的心情といったものを土地に根差した彼らの言葉や民俗、信仰や伝説など、現実と幻想を織り交ぜて描くことによって、共産党独裁体制の正当性の意味を問うた1980年代中国のルーツ文学に通底する姿勢であるといえるかもしれない）。

物語の持つこうした多響性は、しかし同時に「あんひと」を殺した犯人の正体に対する曖昧さになって現れている。「あんひと」を中心に組合活動を開始した爺さまたちは、地主やヤクザたちの度重なる妨害にも負けずに着々と「未墾地解放運動」を前進させてゆくが、些細なことから組合員のひとりが地主側と接触したことで、「あんひと」と爺さまたちとの関係に亀裂が生じ始める。1950年1月のコミンフォルムによる日本共産党批判は、日本の共産主義運動をいわゆる「国際派」と「所感派」へと分裂させ、その内部において血で血を洗う醜い争いを繰り広げさせる事となったが、そこで凄惨なリンチ事件を経験して村へと流れてきたという「あんひと」は、身内から生まれたスパイに対して断固たる立場をとろうとしたために、それまで堅固であった（と思われていた）爺さまたちとの関係に微妙な影を落としてしまうこととなる。

そして、そのわずか数日後、山の奥の谷あいでは「あんひと」の死体が発見される。組合員たちは懸命にその死の不当性を訴えるが、その死因と加害者について語るものは誰もいない。重ならない証言はまるで藪の中。「あんひと」を殺したのはいったい誰か。誰が「あんひと」を裏切ったのか。そして、なぜ裏切らなければならなかったのか。

語り手である「ぼく」が本当に知りたいのは、まさにこの裏切りについてだ。テキストの後半に至って、「ぼく」は50年前の戦いを、「あんひと」のことをすべて知っていたことを白状する。「ぼく」が本当に知りたかったこと、知らなかったこととは、なぜ爺さまが「あんひと」を裏切ったのかということだ。過去と現在、人とけもの、生者と死者が入り乱れた異界において、「ぼく」は死んだはずの爺さまにひたすらその理由を求め、懇願し続ける。

裏切りとは何か。いったい誰が、誰を、裏切ったのか。饒舌な語り手と彼の語りから独立した登場人物たちは、それぞれの想いを無法図に語る。皮肉屋のカラスは、歴史の闇深くに葬り去られていた『イスカリオテのユダの福音書』を紐解いて、ユダの裏切りはイエスの命によるものだったと声を上げ、それを受けて利口な子ミミズクは、ユダがイエスを裏切ったのではなく、イエスがユダを裏切ったのだとさえずってみせる。そして異界の白い炎の中に身をやつした「あんひと」の娘は、白昼夢のようなその世界で、父である「あんひと」を狡い人だと云って、運動に絶望した父が要領よく裏切ることで自分を殺させたのだとつぶやく……。

裏切り。それは「あんひと」を殺した爺さまに属するものでありながら、殺された側にも属

するものであった。爺さまは裏切りの意味を問う「ほく」の懇願に、ぼつりと「石碑だ」と零す。石碑のことかと問い直す「ほく」に対して、爺さまはただ「石碑だ」と繰り返す。「あんひと」が自分を裏切った瞬間を問われた爺さまは次のように語る。

石碑は、ただ土に突っ立てるだけ。それにひきかえ、石碑は、土に食い込む。食い込んで抑さえつける、押しつける。人間の意思を——人間の意思で。

土とは大地だ。農民はその大地とともに生きる存在である。その土に「あんひと」がその理想の正しさとは関係なく自らの「意思」／「石碑」を埋め込もうとすることは、百姓である爺さまにとって裏切りでしかなかった。「あんひと」を抹殺しなければならないといった爺さまの切迫した思いは、「あんひと」の語った理想を強くひた向きに強く信じたからこそ生まれた怒り、絶望、そして哀しみに満ちた殺意であったのだ。

しかし、「革命」の機運が完全に消滅したいまを生きる「ほく」が、鳴かなかった鳥たちの声に耳を傾けようとするのは、なぜか？ あるいはそれは戦いに敗れ、死んでいった者たちへの鎮魂歌であったのだろうか。しかし、追憶や記念などといったものを糞喰らえだと言って笑い飛ばす「ほく」の語りからは、そうした殊勝な気持ちは微塵も感じられない。2000年来、ユダが抱え込まざるを得なかった孤独、そして50年間、爺さまが抱え込まざるを得なかった孤独は、決して名誉回復などといったものではあがなえる性質のものではない（なぜなら、それはかつて彼らを苦しめ、そしてまた彼らが反抗したものへの投降でもあるのだから）。それを知りつつも、「ほく」はそれを語る。歴史の闇に沈められた敗者たちの苦悩を、苦痛を、不信を、「ほく」は語り続ける。なぜか？

絶え間ない歴史の流れの中で数え切れぬイエスが生まれ、そしてユダが生まれていった。そのことは、あらゆる社会運動がそのうちに孕んだ宿痾とさえいえる。理想を実現するために奔走する人間とそれに共鳴した人間との間に広がる絶望的な溝。その溝を、己の無知や信念の欠如といった観点からではなく、他者への癒しがたい渇きとして自覚した瞬間、裏切りは生まれる。そしてそのことは、いつもつきつめられることなく、瀑布の如き歴史の流れの中で忘却され、繰り返されてゆく。時間と空間を越え、冥界の幽鬼となった爺さまのかつての同志たちの、「理想には火を、裏切り者には死を！」といった叫びは、爺さまをユダとして抹殺する事で、その裏切りが持っていた本当の意味が、鳴かなかった鳥たちの祀りによって歴史の深い闇の奥へと再び隠匿されてしまったことを意味しているのではないだろうか。復讐に燃える青い炎の中でようやく裏切りの意味を理解した「ほく」は、爺さまとの間にようやく和解らしきものを果たすが、しかしそのことは同時に自身もまたユダの後裔として冥界の青い業火に焼かれることでもあった。

『草青火』は、戦後の混乱期に芽生えた革命への熱い期待とその失敗の物語であると同時に、有史以来、生まれては消えて行った無数の信仰や主義・主張、そしてそれが目指すところの理想に孕まれた裏切りの物語である。ユダの哀しみ。幾千、幾万もの言葉を費やして構築された理論や思想も、この哀しみを理解出来ない限り、おそらく永遠に机上の空論から抜け出せないのかもしれない。